

絵筆を置いて、大きなため息をついた。腕を突き上げ、大きく伸びをすると、背中からポキポキ音がした。

あの日から、何度も描きなおして、やっと満足のいく絵が出来上がった。ボードを持ち上げ、少し離したり、近づけたりしてバランスを見る。大丈夫だ。これでやっとー。

疲労と満足感、そして、形容しがたい寂しさが心に拡がる。そのまましばらく、描き上げた絵に見入っていた。

そうだ、写真を送ろう。ふと思いついた。この絵を描くと決めてから、私のことを、友人はずっと心配してくれていたのだ。絵が完成したことを知ったら、きっと喜んでくれるに違いない。

絵を壁に立てかけ、スマホを構える。光の入りが気に入らず、ああでもない、こうでもないと場所を移動し、窓際に落ち着いた。

ここなら、よし。改めて、シャッターボタンに手をかけようと画面を覗き込む。

すると、「QRコードの読み取りに成功」という表示が出た。

え、と思わず口に出し、戸惑う。

何が？ 絵を見つめ直すが、あの独特の形、それと見間違うような黒塗りの四角なんかどこにも描かれていない。私は眉根を寄せながら首をかしげた。

そういえば。インターネットの記事か何かで、「花の写真を撮ろうとしたところ、スマホがQRコードの情報を読み取った」という話を以前読んだことがある。仕組みはよく分からないが、自然の形などをコードに読み違えるということは、ありえなくはないのだろう。

一瞬迷ったが、興味本位でその表示をタップした。

普段より読み込み時間が長く、このサイトにつないでよいものか、不安になってくる。しかし、セキュリティ対策ソフトが反応していないので、まあ大丈夫だろうと言い聞かせる。

訳の分からない文字列のURLが現れ、またそれをタップした。すると、動画が再生された。

不鮮明な画像だった。ほとんどモノクロだ。どうも部屋の中を、高い位置から撮影しているようだ。時折ノイズが入る。動きがほとんどない。

しばらく見ている内に、私は恐ろしいことに気づいた。

——これは……私の部屋ではないか？

肌が粟立った。

盗撮？ いつの間に？ 何が目的で？ 動悸が激しくなる。私は部屋を見渡した。映っているのは、今私が立っているリビングだ。多分あの棚の上辺り、と見当をつけるも、カメラらしきものなどない。私はまた画面に目をやる。映像が上下に動いたので、さらにゾッとする。

今度は違うカットだ。窓際から外を眺める形で動画が続く。窓の外に、ちらりと私の姿が映っていた。私は撮られていることに、まるで気づいていない。

まさかストーリーカー……？

頭を抱え、唸った。

私は一人暮らしで、友人も少ない。インドア派のため、仕事に行く以外で部屋を空けることもあまりない。つまり、他人が部屋に入る機会がほとんどないのだ。

一時停止を押した。これ以上見続けるのが怖かった。こんなものもう消そうかー、いや、答えを知らないままでは、これからはずっとどこかに仕掛けられたカメラに怯えながら暮らすことになってしまう。

部屋を歩き回り、散々迷ったあげく、私は再度、動画を再生する決断をした。

動画は延々と続く。スマホをいじっている背後からや、料理をしている姿。風呂上がりなど。無防備な私の姿が次々映し出される。上から見下ろし、下からねめつけるように、部屋の隅からこっそりと……。次々に現れる「私」の姿を、口に手を当て、震えながら、食い入るように見つめていた。

見続ける内、ふと、違和感を覚えた。

一つの可能性に思い至り、震える手で動画のある位置までスキップした。ここだ、と見当をつけ、再生し直す。

画面に、笑顔で手を伸ばす私が映っていた。

私は——この動画の視線の主を抱きしめた。画面に私の顔が近づいてくる。そして、頬を寄せながら、こう言った。

『ほんとに可愛いねー』

続いて響く、グルル………という音。私の頬を、涙が伝った。

「……なっちゃん？」

スマホを耳に押し当て、愛猫が喉を鳴らすときの音を必死で聴いた。懐かしい音だった。優しい振動が思い出され、心が温かくなる。

なっちゃん——「なつ」は、私の飼った猫の名だ。半年ほど前、心臓肥大が原因であつといふ間に逝ってしまった、まだ四歳だった、可愛い私の猫。

なつを失った私はボロボロで、うまく眠れず食べられず、何をする気力も湧かず、周囲の人を心配させていた。見かねた私の友人が、私の肩をさすりながら言ったのだ。

なっちゃんの絵を描いたら？

あなたがどれだけあの子を大事に思っていたか、大好きだったか。あの子がこの世にいたということ、絵に描いたらどう？ あなたは絵が得意なんだから。ね？

私はその言葉を聞いて、やつと生きる目的を見つけた。私が忘れたら、私がいなくなったら、なつは今度こそ本当に死んでしまう。なつという存在を、絵でもいいから残さなければ。私がしてあげられることは、もうこれくらいしかない。

私は毎日泣きながら絵を描いた。何枚も何枚も描いた。あんな可愛い子が、あんな死に方をしてはいけない、そう思いながら夢中で描いた。ドジで、穏やかで、ちょっと臆病な猫。楽しい日々とまるで対極の、あの日の朝の、部屋の寒さを思い出しながら。硬くなった身体。焼き場から帰ってきた、お骨の小ささを思い出しながら描いた。

そしてやつと完成したのがあの絵だった。

つやつやとした、黒い毛並み。問いかけるように小首をかしげ、大きな目をこちらに向けている。瞳の色はヘーゼルで、近くで見たら美しいガラスのようだ。あの日手向けた真っ白な百合の花と、あの子が大好きだった緋色の毛布も背景に入れた。

なんて可愛い猫。愛おしい姿。なつと過ごした日々が胸に迫る。

一方的にしあわせを貰ってばかりだった、と、今までずっと思っていた。

でもきつと、なつだってしあわせだったのだ。あの子の视界にはいつも私があった。私を求めてくれていた。勿論、この家には我々しかいなかったのだから当然だということを差し引いても。

グルル………、と響くこの音が、嬉しいときに鳴らすこの音が、何よりそれを証明している。

動画の最後に私の寝顔が映った。なつはしばらく私を見つめていた。じつと、じいっと見つめて、それからゆっくりと、掛け布団の中に忍び込み、また喉を鳴らした。

スマホの画面に手を伸ばす。永遠に触れられない柔らかさを、再び指先に感じたように、口角が上がった。

さようなら、なっちゃん。今まで本当にありがとう。
また、いつか。

あれ以降、なつの絵にスマホカメラを向けても、二度とコードの読み取りに成功することはなかった。もう二度とあの動画を見ることは出来ない。だが、私は十分すぎるほどの贈り物を貰ったと思っている。

最近、外出する機会も増えてきた。絵のモチーフ探しのためだ。絵を描くことは、心の安定に有効なようで、少しずつなつを思い出して泣くことも減ってきている。

今日は公園を散策している。秋の空は青く澄んで、高い。

植えられたコスモス達が、風に吹かれて揺れていた。淡いピンクが可愛らしい。思わずスマホのカメラを向けると、あの表示が画面に現れる。

――QRコードの読み取りに成功

構えた手を下ろし、私は花の向こうを見つめた。

明るい光が心に射し込む。かすかな鳴き声がして、茂みの奥の方から、黒い子猫が、私に向かって走ってくるのが見えた。